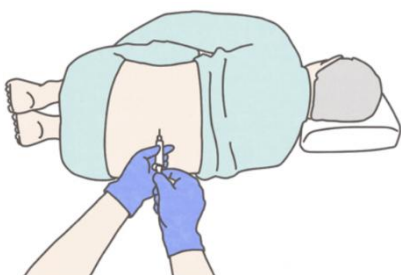


Nさんは33歳で1型糖尿病と診断されました。口渇・多飲・多尿・全身倦怠感を伴う10kgの体重減少を認め、病院にたどり着いた時には血糖値 $\geq 400$  mg/dLで即入院、同日からインスリン注射が開始となりました。1型糖尿病とは、膵臓からのインスリン分泌が枯渇した結果、絶対的なインスリン欠乏に至る病気です。Nさんは退院後も毎日インスリン注射を続けましたが、何度も何度も低血糖に悩まされました。当時は、低血糖アラート機能付きのリアルタイム持続血糖測定器なんて便利な医療機器はありませんでしたから、重症低血糖（血糖値 $\leq 54$  mg/dLまで低下し、意識を失って倒れてしまうほどのひどい低血糖）で何回も救急車で病院に搬送されました。

60歳のある夏の夜、Nさんは突然大声を上げながら全身痙攣をきたして倒れ、呼びかけに反応しなくなりました。びっくりした御家族が救急車を呼びNさんは救急搬送、けいれん発作を疑われて同日入院となりました。Nさんは頭部



MRI検査に髄液検査（腰椎と腰椎の間に医療用の長い針を刺し、髄液を採取する

検査)まで受けましたが、けいれんの原因は分からず、ひとまず抗けいれん薬を内服して様子を見ることになりました。でも実はこれ、低血糖発作が原因だったんです。あまりにも急激な血糖値低下で、脳へのブドウ糖供給が極度に不足した結果、意識レベルが低下し、錯乱・痙攣・昏睡状態に陥ることがあるんです。低血糖ってなんて恐ろしいんでしょう。

Nさんは65歳の時も運転中に突然意識消失して交通事故を起こし、外傷性気胸・多発骨折で緊急入院となりました。この時もけいれん発作が第一に疑われましたが、急激な血糖値低下が意識消失の原因でした。30分ちょっとで血糖値が300から70 mg/dLまで一気に下がったんです。低血糖アラート機能付きのリアルタイム持続血糖測定器がない時代の1型糖尿病患者さんは文字通り、生きるか死ぬかの瀬戸際に立たされるほどの低血糖に苦しめられていたんです。

2018年1月、保険適用となったばかりのFreeStyle リブレを早速Nさんに付けて頂いたところ、目を疑うほどの激しい血糖変動と毎晩のように繰り返される夜間低血糖が判明しました。1日の総インスリン量を42→33単位(21.4%減、

かなりの減量です)に調整し、低血糖はやっと消失しました。日中の高血糖につられて大量に打っていたインスリンがあだとなり、深刻な夜間低血糖が起きていたことを、当時の医師達は誰も知り得なかったのです。



FreeStyle リブレが導入されてからは、Nさんは“てんかん発作”と見間違えるほどの重症低血糖を一度も起こしませんでした。主任部長は、医療の進歩が患者さんにもたらす恩恵をまざまざと実感したのです。

Nさんは、その生涯でただの一度もインスリンを打ち忘れたことがありませんでした。ただの一度も通院を忘れませんでした。毎日コツコツと血糖値を測り、1日4回インスリンを自分のお腹に注射し続け、週5日仕事に行き、2か月に1回、主任部長の診察を受けに通院を続けて下さいました。

72 歳、N さんに小細胞肺癌が見つかりました。若い頃からずっと 1 日 30 本のタバコを吸っていた N さん、家庭では禁煙していたことになっていたのも、バレて奥様に大目玉をくらったとお聞きしました (N さんらしい・・・笑)。放射線治療に加えて、苦しい抗癌剤治療が始まりました。N さんは抗癌剤の副作用で本当にお辛そうでした。入院治療に耐え、副作用に耐えて、抗癌剤治療は命が続く限り果てしなく繰り返されます。どんなにしんどい時も N さんは血糖値を測り、1 日 4 回のインスリン注射を決して止めませんでした。

2025 年 7 月、N さんは逡巡の末、抗癌剤治療をおしまいにすることを決意しました。2026 年 2 月、N さんは苦痛で食事が摂れなくなり、自宅で過ごすことに限界を感じて緩和ケア病棟に入院、その 2 週間後に静かに旅立ちました。最後は奥様、娘様と息子様に見守られながら穏やかに息を引き取ったそうです。意識を失うまでは N さんはご自分でインスリンを打ち続け、意識を失ってからは緩和ケア病棟の看護師が N さんにインスリンを打ち続け、それは亡くなる最後の日まで続けました。33 歳で 1 型糖尿病を発症した N さんは、約

40年間、毎日インスリンを打ち続けました。主任部長は最後の12年間をNさんの主治医として担当させて頂きました。

Nさんが緩和ケア病棟にお入りになった時、主任部長はNさんに会いに行きました。これまでの12年間を振り返ってとりとめのない話をさせて頂いた後、主任部長は彼に、こうお伝えしました。「Nさん、これでお会いするのは最後だと思います。長い間、私の外来にお通い頂き誠にありがとうございました。私はNさんからたくさん事を学ばせて頂きました。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。」Nさんは、涙ぐんでうなずいて下さいました。

Nさんが亡くなられた後、奥様からお手紙を頂戴しました。満開の桜の封筒に入っていたお手紙には、「先生、最後に会いに来てくれたんや。」とNさんが喜んで下さっていたと綴られていました。

主任部長、今年の桜は、Nさんを思い出しながら眺めたいと思います。Nさん、またいつかお会いしましょう！

Nさんのお話を掲載するにあたり、一切の個人情報を伏せるよう配慮し、  
その上でNさんのご家族のご許可を頂いております。